

幼稚園教諭の保育実践に影響を与える要因の検討：保育者と子どもの服装に着目して

The consideration of factors influencing Kindergarten teachers' childcare practices

大 村 壮

キーワード：幼稚園、幼稚園教諭、保育実践、
Kindergarten, Kindergarten teachers, childcare practices

問題・目的

1990年代あたりから日本において「保育の質」が盛んに議論されるようになった(秋田ら, 2007, 2011; 大宮, 1996, 1997)¹。保育の質にはさまざまな面があり、例えば Harms ら (1998) は保育環境評価スケールを、空間と家具、個人的な日常のケア、言語 - 推理、活動、相互関係、保育計画、保護者と保育者の7項目に分けている。このうち、相互関係は日々の保育において保育者が子どもとどのように関わっているのかに関する項目である。この保育者と子どもの相互関係の側面はとても重要であり、大宮 (1997) も保育の質の人間関係的要素に注目し、Garland & White (1980) を引用しつつ、保育者と子どもの関係の質に言及している。このように保育者が子どもとどのような関係をもつのか、あるいは子どもにどのように関わるのかということの重要性が指摘されている中でそれに関わる保育観が盛んに研究されるようになってきた。そして幼稚園教諭や保育士といった保育者がどのような保育観をもって日々の保育に臨んでいるのかが重要であり、保育者や保育を学んでいる学生がどのような保育観を持っているのかが明らかにされてきた(宮沢・増田, 2007; 中, 1996; 小原ら, 2013; 田中ら, 2013)。これらの研究からは保育者などがどのような意識をもっているのか、またそれが経験年数や保育効力感などどのように関連しているのかを検討している。その一方で鯨岡 (2000) は、重要だと語られていることが実際に実践に移され、子どもとどのような影響が及ぶのかが問題であるとしている。また、大宮 (1997) は、Garland & White (1980) が9つの施設を保育者 - 子ども関係に基づいて2つに分類していることに関して、その分類の興味深い点として、保育者の意識などではなく、実際の保育場面で観察された事実に基づいて識別された行動や会話や習慣の差異によって分類されている点を挙げている。つまり、保育観という意識ではなく、その意識に基づいて実際にどのように行動しているのか、どのように子どもと会話しているのかといった保育実践が重要なのである。保育者が実際にどのような保育実践を展開しているのかについて、これまでは主として保育記録を用いて分析するという研究が多い。例えば菊地・内田 (2012) は、子どもが主体となるために、保育者が子どもにどのような声かけをしているのかについて発達の最近接領域概念に交えて分析している。黒田 (2013) も子どもの主体性を促す保育について、保育記録を分析している。またビデオ撮影し、それを分析するという研究もある。例えば砂上ら (2015) は、調査用に4

¹ これらの研究では欧米において幼少期に受けた保育がその人の将来の収入や犯罪などに影響を与えることが明らかにされていることが議論されている。

歳児クラスでの片付け場面をビデオ撮影し、それを調査協力者となる保育者にそのビデオ映像を見てもらい意見や感想を出してもらおう。それも録音し、ビデオ映像と語りデータとともに分析して保育者の保育実践を保育者に解釈してもらおうということで分析している。そして観察によってデータを収集する研究がある。例えば森ら（1991）は、行事場面や自由遊び場面での保育者の行動様式を記録し、その特性を検討している。また中澤・鍛冶・石井（1995）は幼稚園での食事場面を観察し、並びに保育者に保育観や食事援助観を調査して、年齢による声かけの違いや援助観による違いなどを検討している。このように保育者が実際にどのような保育実践を行なっているのかについて、これまでの研究では、主に観察などの手法を通して少数の事例を集めて検討するという方法がとられてきた。しかし少数の事例しか集まらず、多くの園を比較検討することができず、全体的な傾向を掴むことができていない。そこで本研究では、保育者養成課程の学生を対象に、彼女たちが4週間実習した幼稚園でどのような保育実践が行なわれていたのかについて調査し、その保育実践に影響を与える要因を検討することにする。具体的には実習でもっとも長く入ったクラスの担当教諭の保育実践について学生に評定してもらい、保育実践の特徴を捉える。なお、学生による評定には限界があるのは事実である。しかしその反面、メリットもある。それはある程度、保育を観察する視点を有した保育者の卵である保育学生という第三者による率直な評定であるという点である。そのためこの方法によって得られたデータはさまざまな限界がありつつもある程度の妥当性もあるものと考えられる。

そしてその保育実践は園それぞれの考え方が反映されるものである。自由保育と設定保育とを単純に対比させ、それぞれの園の実践をプロットしていても一箇所に集まるということはないだろう。それぞれの理念や目的があり、保育実践が展開されているのである。また園によって違いがある者として子どもの服装と保育者の服装がある。子どもの服装は、園服があったり、私服があったりなど園によってさまざまである（原田・長谷川, 1996; 1997）。原田・長谷川（1996）によると園服のある幼稚園は78.7%であった。そして園服の指定がなされたのは開園当時という回答や、かなり以前で不明という回答が約半数であった。また制服がない幼稚園では、開園当時からないという回答が多く、「必要がないため」という理由がもっとも多かった。このように子どもの園服をどのように考えているのかについて園によってさまざまな違いがある。入江（1984）は、幼稚園の園服のありようは、その幼稚園の在りよう全体を象徴しているように思えると述べている。さらに子どもが遊ぶ人そのものであるということを深く認識している園であれば、園服は採用しないはずだと述べている。このように子どもの服装をどのようにしているのかは個々の園の考え方を象徴していることのようにある。また保育者の服装も同様のことがいえるのではないだろうか。植原（2002）は保育者の服装は人的環境としての大きな役割を担っているとしており、職場での服装は、機能性や職場の雰囲気などを重視して統一され規制されている場合が多いと述べている。そして三塚（1984）は保育者の服装を考察するなかで、教育現場では、指導する側の服装とその教育内容が密接な関連をもっていると述べている。このように、保育者の服装は子どもの服装同様、個々の園の考え方にに基づき決められ、三塚（1984）が指摘するように、多少なりとも保育内容とも関連するのではないだろうか。

そこで本研究では、子どもが日中、どのような服装で過ごしているのか、保育者がどのような服装で保育しているのかということと保育実践の関連について探ることを目的とする。

方 法

(1) 調査協力者

T 短期大学保育科の2年生のうち、4週間の教育実習を終えた189名である。

(2) 手続き

教育実習終了翌週の授業のなかでアンケートを実施した。実施時期は2015年6月である。

(3) 調査項目

①運営主体（公立・私立）

②もっとも長く実習したクラス（年少・年中・年長）

③保育中の保育者の服装（お揃いのエプロン等・バラバラのエプロン等・バラバラのシャツ等・個人によってバラバラ・通勤のままなどの私服）

④日中の子どもの服装（お揃いの体操着や園服・人によってバラバラの服装）

⑤実習先の幼稚園の保育実践の様子（6件法）：梶田・後藤・吉田（1984, 1985）で用いられていた個人レベルの指導論の測定項目を基に、浅川（2009）、浅村・東・河野・橋村（2014）、菊地・内田（2012）、鯨岡（2014）、黒田（2013）、中澤ら（1993）、野口・小田ら（2005）、野口・鈴木ら（2007）、中（1996）、下山田・小林（1996）を参考に、38項目を作成した。また梶田ら（1984, 1985）と同様に、SD法のように保育実践を対にして提示し、実習中に見た保育者の保育実践について、どちらにより近かったかという形で回答を求めた。

結 果

(1) 保育者の服装と子どもの服装

保育中の保育者の服装と日中の子どもの服装について運営主体によって違いがあるのか整理した。なお、保育者の服装に関しては最少期待値が5未満だったため、フィッシャーの直接確率法によって検定した。子どもの服装に関しては χ^2 検定を行なった。その結果、保育者の服装に関して、得られたデータのパターンの確率が0.00000132となった。そのため揃いのエプロン等は、私立幼稚園に有意に多く、公立幼稚園に少なかった。また個々バラバラの服装は、公立幼稚園に有意に多く、私立幼稚園に少なかった（Table1）。

Table1 保育者の服装の運営主体ごとの比較

	お揃い エプロン等	バラバラ エプロン	バラバラシャ ツ等	個々で バラバラ	通勤着等の 私服	計
私立	54 ↑ (41.91)	44 (46.48)	18 (18.29)	17 ↓ (25.14)	11 (12.19)	144
公立	1 ↓ (13.10)	17 (14.52)	6 (5.71)	16 ↑ (7.86)	5 (3.81)	45
計	55	61	24	33	16	189

() 内は期待値

子どもの服装に関して有意差が認められた ($\chi^2(4,189)=26.80, p < .001$)。子どものお揃いの服装は私立幼稚園に多く、公立幼稚園に少ない。バラバラの服装は公立幼稚園に多く、私立幼稚園に少なかった (Table2)。

Table2 子どもの服装の運営主体ごとの比較

	お揃いの服装	バラバラの服装	計
私立	102 ↑ (86.86)	42 ↓ (57.14)	144
公立	12 ↓ (27.14)	33 ↑ (17.86)	45
計	114	75	189

() 内は期待値

(2) 保育実践の因子分析

保育実践についてプロマックス回転の最尤法で因子分析を行なった。その結果、複数の因子から高い負荷を受けている項目や2項目のみで因子を構成している項目などを削除し、再度因子分析を行ない、固有値 1.0 以上で因子負荷量が .30 以上のものを採用したところ、最適解を得た 4 因子が抽出された (Table3)。第 1 因子は、「失敗したことを注意したり叱ったりする - 成功したことを褒めたり認めたりする」、「造形や製作のとき、まず子どもの「できた」という思いを受け止める - 造形や製作のとき、子どもの思いより、まず作品の修正点を指摘する」、「子どもが一生懸命にやることよりも、うまくやることを重視する - 子どもがうまくやることよりも、一生懸命にやることを重視する」などから構成されているため、「子どもの良さを認める保育実践」と命名した。第 2 因子は、「鉄棒やマットなどの運動がうまくできるように指導する - 鉄棒やマットなどの運動では、その活動に興味を持つように指導する」、「ワークブックやドリルなどを使って指導する - 園での日常生活での体験を通して指導する」、「言葉や数の学習は子どもの自然な意欲に任せる - 言葉や数の学習を積極的に進める」などから構成されているため、「子どもの自主性を見守る保育実践」と命名した。第 3 因子は、「子どもたちに考えさせる場を多く持たせる - 保育者が先回りして言葉かけをしている」、「保育者がすぐに助言したり、手助けをせず、できるだけ子ども同士の関わりを大切にしている - 子どもの動きの前に保育者が先に動いたり、言葉を発して、子どもの動きを誘

Table3 保育実践の因子分析

	I	II	III	IV	共通性
$\alpha = .831$					
因子 I：子どもの良さを認める保育実践					
失敗したことを注意したり叱ったりする－成功したことを褒めたり認めたりする	.836	-.009	.031	-.039	.635
保育者同士が互いの保育を認めていない－保育者同士が互いの良さを認め合っている	.733	-.162	-.033	-.085	.383
造形や製作のとき、まず子どもの「できた」という思いを受け止める－造形や製作のとき、子どもの思いより、まず作品の修正点を指摘する	-.686	-.050	-.218	-.120	.512
子どもが一生懸命にやることよりも、うまくやることを重視する－子どもがうまくやることよりも、一生懸命にやることを重視する	.644	.291	.165	.031	.655
予想外の出来事が起こっても、それを学びにつなげる－予想外の出来事が起こっても、それを無視する	-.521	-.026	.080	-.095	.407
保育者が自ら保育を楽しんでいる－保育者が大変そうに保育している	-.509	.005	.241	-.012	.429
時と場合によって柔軟に指導の計画を変える－いったん決めた指導計画を実行する	-.509	.180	.259	-.142	.423
保育者が失敗を恐れてびくびくしている－保育者が失敗を恐れず、安心して自分らしさを出せている	.467	.024	-.166	-.198	.234
子どものやりたいことを優先する－保育者のやりたいことを優先する	-.318	-.243	-.002	-.176	.393
$\alpha = .771$					
因子 II：子どもの自主性を見守る保育実践					
鉄棒やマットなどの運動がうまくできるように指導する－鉄棒やマットなどの運動では、その活動に興味を持つように指導する	.045	.745	.152	-.112	.449
ワークブックやドリルなどを使って指導する－園での日常生活での体験を通して指導する	-.093	.709	-.022	.011	.449

言葉や数の学習は子どもの自然な意欲に任せると言葉や数の学習を積極的に進める	.075	-.690	.180	.028	.527
運動遊びでは、うまくできることを目標にして指導するー運動遊びでは、運動の出来栄えよりも運動を楽しくするように指導する	.233	.597	.050	-.063	.501
子どもが最後までねばり強くやり遂げるように静かに見守るー早くうまくやり遂げられるように積極的に援助する	.162	-.381	.138	-.229	.273
$\alpha = .759$					
子どもたちに考えさせる場を多く持たせるー保育者が先回りして言葉かけをしている	.040	.054	.792	.210	.482
保育者がすぐぐに助言したり、手助けをせず、できるだけ子ども同士の関わりを大切にしている	-.077	-.051	.623	-.043	.504
ー子どもの動きの前に保育者が先に動いたり、言葉を発して、子どもの動きを誘導している	.151	-.171	.497	-.146	.367
多少時間がかかっても必要な準備を自分で考えて行動するように関わるー保育者が先回りして準備を整えてしまう	.065	-.140	-.485	.070	.245
ケンカが生じた時、保育者がすぐに入って解決するーケンカが生じた時、子どもに解決を任せ	-.171	-.172	.379	-.056	.398
る	.247	.073	-.363	-.017	.311
子どものペースで活動が進んでいるー保育者のペースで活動が進められている					
子どもに対して「～してはいけません」「～ダメ」等の言動があるー子どもに対して「～していいの？」等の言動がある					
$\alpha = .730$					
因子Ⅳ：子どもに合わせた保育実践					
遊びが盛り上がりながらも、時間をきちっと守るー遊びが盛り上がり、遊びを優先させる	-.026	-.180	-.011	.921	.692
あらかじめ立てた時間の予定に沿って指導するー予定を柔軟に変更し、子どもの動きに合わせて指導する	.033	.029	.111	.630	.384
造形や製作では、始めに保育者がきめ細かく計画し、それに沿って指導するー造形や製作では、課題の大枠だけを決め、あとは子どもの自主性に任せる	-.051	.197	-.063	.497	.392

導している」、「多少時間がかかっても必要な準備を自分で考えて行動するように関わる - 保育者が先回りして準備を整えてしまう」などから構成されているため、「先回りの保育実践」と命名した。そして第4因子は、「遊びが盛り上がっていても、時間をきちっと守る - 遊びが盛り上がってれば、遊びを優先させる」、「あらかじめ立てた時間の予定に沿って指導する - 予定を柔軟に変更し、子どもの動きに合わせて指導する」、「造形や製作では、始めに保育者がきめ細かく計画し、それに沿って指導する - 造形や製作では、課題の大枠だけを決め、あとは子どもの自主性に任せる」から構成されているため、「子どもに合わせた保育実践」と命名した。またクロンバックの α 係数を算出したところ、「子どもの良さを認める保育実践」因子が.841、「子どもの自主性を見守る保育実践」因子が.771、「先回りの保育実践」因子が.759、そして「子どもに合わせた保育実践」因子が.730であった。4つの因子ともに高い信頼性が確認された。

(3) 実習クラスによる保育実践の違い

実習したクラスの違いによって観察した保育実践が異なるのかを調べるために一元は分散分析を行なった。その結果、「先回りの保育実践」因子のみ有意差が認められ、年長クラスよりも年少クラスの方が、平均値が高かった。このことから、年少クラスの方が年長クラスよりも先回りの保育実践が展開されていることが明らかになった (Table4)。

Table4 保育実践の実習クラスでの比較

	実習クラス			F 値	多重比較
	年少	年中	年長		
子どもの良さを認める保育実践	5.09 (0.64)	4.99 (0.63)	5.08 (0.74)	0.31	
子どもの自主性を見守る保育実践	4.31 (1.13)	4.28 (0.91)	4.15 (1.04)	0.25	
先回りの保育実践	3.00 (0.81)	2.72 (0.97)	2.53 (0.74)	3.41*	年少>年長
子どもに合わせた保育実践	3.45 (1.25)	3.23 (1.20)	3.35 (1.10)	0.37	

* $p < .05$, ()内はSD

(4) 運営主体、保育者の服装、子どもの服装の影響について

因子ごとに運営主体と保育者の服装、並びに子どもの服装の影響を検討するために分散分析を行なった。ちなみに保育者の服装と子どもの服装の関連を調べることが本研究の目的ではないため、保育者の服装と子どもの服装については別々に分析した。その結果、以下のことが明らかになった。まず「子どもの良さを認める保育実践」因子において、運営主体の主効果 ($F(1, 175) = 6.05, p < .05$) と保育者の服装の主効果 ($F(3, 175) = 3.28, p < .05$) が認められた (Table5)。保育者の服装の主効果について、Bonferroni法による多重比較を行なった結果、私服とバラバラのエプロン等並びに個々バラバラの服装との間に有意差が認められ、私服がバラバラのエプロン等並びに個々バラバラの服装よりも平均値が高かった。

Table5「子どもの良さを認める保育実践」因子における保育者の服装、子どもの服装と運営主体別の平均値

保育者 服装	お揃いの エプロン等		バラバラの エプロン等		個々バラバラの 服装		私服		合計
	お揃い 服装	自由な 服装	お揃い 服装	自由な 服装	お揃い 服装	自由な 服装	お揃い 服装	自由な 服装	
幼児服装									
私立園	4.87 (0.73)	5.49 (0.53)	4.89 (0.63)	4.99 (0.52)	4.63 (0.59)	5.11 (0.60)	5.67 (0.24)	5.40 (0.60)	4.96 (0.67)
公立園	6.00 (1.00)	— (—)	5.30 (0.38)	5.13 (0.54)	4.63 (0.53)	5.33 (0.62)	5.89 (0.16)	5.56 (0.33)	5.28 (0.57)
全体	4.95 (0.74)		4.99 (0.58)		5.02 (0.66)		5.56 (0.45)		

() 内は SD

次に「子どもの自主性を見守る保育実践」因子において、運営主体の主効果 ($F(1, 135) = 7.58, p < .01$)、子どもの服装の主効果 ($F(1, 139) = 4.25, p < .05$)、そして運営主体と保育者の服装の交互作用 ($F(3, 135) = 3.07, p < .05$) が認められた (Table6)。交互作用に関して単純主効果の検定を行なった。保育者のお揃いのエプロン等における運営主体の単純主効果 ($F(1, 135) = 4.69, p < .05$) と、バラバラのエプロン等における運営主体の主効果 ($F(1, 135) = 15.58, p < .001$)、そして個々バラバラの服装における運営主体の主効果 ($F(1, 135) = 9.38, p < .01$) が有意であった。また私立園において保育者の服装の主効果 ($F(3, 135) = 5.23, p < .01$) が有意であった。私立園において、私服がお揃いのエプロン等、バラバラのエプロン等、そして個々バラバラの服装よりも平均値が高かった。

Table6「子どもの自主性を見守る保育実践」因子における保育者の服装、子どもの服装と運営主体別の平均値

保育者 服装	お揃いの エプロン等		バラバラの エプロン等		個々バラバラの 服装		私服		合計
	お揃い 服装	自由な 服装	お揃い 服装	自由な 服装	お揃い 服装	自由な 服装	お揃い 服装	自由な 服装	
幼児服装									
私立園	3.83 (0.90)	4.92 (0.88)	3.68 (1.05)	3.67 (1.48)	3.70 (1.07)	4.60 (0.65)	4.40 (1.13)	5.70 (0.26)	3.98 (1.06)
公立園	6.00 (1.00)	— (—)	4.90 (0.38)	4.93 (0.44)	4.40 (0.57)	5.13 (0.57)	— (—)	4.67 (0.90)	4.97 (0.59)
全体	4.00 (0.99)		4.00 (1.12)		4.47 (0.96)		5.00 (0.91)		

() 内は SD

次に「先回りの保育実践」因子において、運営主体の主効果 ($F(1, 177) = 9.66, p < .01$)、保育者の服装の主効果 ($F(3, 177) = 5.26, p < .01$) が認められた (Table7)。保育者の服装の主効果について、Bonferroni 法による多重比較を行なった結果、私服とバラバラのエプロン等並びに個々バラバラの服装との間に有意差が認められ、私服がバラバラのエプロン等並びに個々バラバラの服装よりも平均値が低かった。

Table7「先回りの保育実践」因子における保育者の服装、子どもの服装と運営主体別の平均値

保育者 服装	お揃いのエプロン等		バラバラのエプロン等		個々バラバラの服装		私服		合計
	お揃い 服装	自由な 服装	お揃い 服装	自由な 服装	お揃い 服装	自由な 服装	お揃い 服装	自由な 服装	
幼児服 装	2.92 (0.73)	2.40 (1.10)	2.76 (0.74)	3.02 (0.81)	2.88 (0.66)	2.81 (0.83)	2.04 (0.90)	2.14 (0.77)	2.79 (0.78)
私立園	6.00 (1.00)	— (—)	2.36 (0.95)	2.26 (0.26)	3.61 (1.21)	2.54 (0.97)	1.33 (0.47)	1.94 (0.67)	2.39 (0.91)
公立園	2.83 (0.81)		2.67 (0.75)		2.78 (0.87)		1.98 (0.74)		

()内はSD

最後に「子どもに合わせた保育実践」因子において、運営主体の主効果 ($F(1, 179) = 8.50, p < .01$)、保育者の服装の主効果 ($F(3, 179) = 3.42, p < .05$)、そして運営主体と保育者の服装の交互作用 ($F(3, 179) = 2.75, p < .05$) が認められた (Table7)。交互作用に関して単純主効果の検定を行なった。保育者のお揃いのエプロン等における運営主体の単純主効果 ($F(1, 179) = 7.21, p < .01$) と、バラバラのエプロン等における運営主体の主効果 ($F(1, 179) = 6.94, p < .01$) が有意であった。また私立園において保育者の服装の主効果 ($F(3, 135) = 5.74, p < .001$) が有意であった。私立園において、私服がお揃いのエプロン等、バラバラのエプロン等、そして個々バラバラの服装よりも平均値が高かった。

Table8「子どもに合わせた保育実践」因子における保育者の服装、子どもの服装と運営主体別の平均値

保育者 服装	お揃いのエプロン等		バラバラのエプロン等		個々バラバラの服装		私服		合計
	お揃い 服装	自由な 服装	お揃い 服装	自由な 服装	お揃い 服装	自由な 服装	お揃い 服装	自由な 服装	
幼児服 装	3.01 (0.93)	4.07 (1.30)	2.97 (1.10)	2.94 (0.90)	3.35 (1.09)	3.21 (0.72)	4.33 (1.78)	4.48 (1.39)	3.21 (1.09)
私立園	6.00 (1.00)	— (—)	4.06 (0.98)	3.61 (0.76)	3.00 (1.00)	3.89 (1.36)	3.77 (1.30)	5.50 (0.71)	3.84 (1.18)
公立園	3.16 (1.08)		3.19 (1.05)		3.47 (1.09)		4.29 (1.44)		

()内はSD

考察

(1) 保育者の服装、子どもの服装について

保育者の服装がエプロンである幼稚園がもっとも多く、その傾向は公立園よりも私立園で顕著であった。植原 (2002) によると第二次世界大戦以前は、幼稚園教諭の服装としては着物や袴姿がよく見られており、戦後になり、昭和30年代は子どもと同じ服装ということで

スモック姿が多く見られ、昭和 40 年代になるとトレーニングシャツやトレーニングズボンの着用が多く見られるようになってきたとのことである。そしてエプロン姿は保育所の保育士に多く見られる服装であり、それが影響していると考えられる。いずれにせよ、保育者が同じエプロン等を着用しているのは私立園に多く、エプロンやスモック、あるいはシャツ等、個々にバラバラの服装をしているのは公立園の方に多いことが明らかになった。これは私立園では各園の理念や方針などがあるためだと考えられる。植原（2002）が指摘しているように、職場の雰囲気などを重視し、理念や方針に合わせて統一されているためだと考えられる。その一方、公立園は園ごとの理念や方針を掲げることはないため、保育者の服装も個々の自由に任せやすいのだと考えられる。

子どもの服装は保育者の服装と同じように、私立園の方がお揃いの服装で日中を過ごす傾向にあり、公立園は子ども一人ひとりバラバラの服装で過ごす傾向にある。やはり私立園では、理念や方針等があり、その考え方から皆同じ服装で過ごすように指導していると考えられる。

(2) 保育実践の因子構造について

本研究では基本的には梶田ら（1984, 1985）を参考に保育実践を測定する項目を作成した。ただし、他の先行研究も参考にして不足している項目などを足して保育実践を測定した。その結果、梶田ら（1985）とは異なる 4 因子が抽出され、4 因子ともに高い信頼性が確認された。このような結果は梶田ら（1985）の研究から約 30 年が経過したことによる時代の影響もあると思われる。

(3) 保育実践の運営主体、保育者の服装、子どもの服装の影響について

本研究ではすべての因子において運営主体の影響が認められた。公立園の方が私立園よりも子どもの良さを認めようとし、子どもの自発性を重視して子どもをじっくり見守り、子どもに合わせた保育実践を展開していることが明らかになった。梶田ら（1985）では公立園の方が私立園よりも体験を重視した保育を展開していることが明らかにされている。そのことにもつながる可能性がある。私立園は経営のために子どもを集めなければならない。子どもが自ら幼稚園を選択することはないだろう。ほとんどの家庭において保護者が子どもの幼稚園を決めていると思われる。すると幼稚園は子ども本人よりも保護者に向けてメッセージを投げかけ、保護者が子どもを預けたくなるような保育を展開するようになると思われる。例えば住田・山瀬・片桐（2012）や木山ら（2002）において保護者が保育内容に期待していることが明らかにされている。木山ら（2002）によると保護者が園に期待する保育内容として、環境教育や社会的ルール等が挙げられていた。いずれにしても何らかの教育的効果を期待しているようである。そのような保護者のニーズを受けて幼稚園では何らかの教育的効果を高めるべく、綿密に構造化された保育計画を立て、それを実践しているということなのだと考えられる。それに対して、公立園は経営を考える必要はなく、私立園とは違い、保護者のニーズからは多少自由でいられるのだと考えられる。そのため、公立園では私立園よりも柔軟な保育計画を立て、さらにその保育計画も実践の中で臨機応変に変えているのだと考えられる。

次に因子ごとに考察していく。「子どもの良さを認める保育実践」因子では、保育者の服装の影響が認められ、保育者の服装が私服である幼稚園がバラバラのエプロン等や個々バラ

バラの服装の幼稚園よりも子どもの良さを認める保育実践を展開していることが明らかになった。倉橋（1937）は、幼稚園は保育者がただ働くところではなく、女性²として生きるところだと述べている。そして服装は働くのに便利な服装というのではなく、感情をもつ服装、個性のある服装でなければならないと述べている。このことから、私服という日常の自由な服装で保育が行なわれているということは、それぞれの保育者が自由に個性的に働いているということの意味しているのだと思われる。そしてそういった個々が自由な服装でいられるということは、子どもも自由でいられるのではないだろうか。そういったことから、私服で働いている園では、保育者が子どもの良さを認めやすくなっていると考えられる。

次に「子どもの自主性を見守る保育実践」因子では、私立園のうち、保育者の服装が私服である幼稚園が、その他の服装の幼稚園よりも子どもの自発性を認めた保育を展開していることが明らかになった。これも先ほどの「子どもの良さを認める保育実践」因子と同様のことが言えるのではないだろうか。私服の幼稚園では、保育者自身、何を着てもいい状況に置かれており、何かしらを着なければならない幼稚園よりも保育者自身の自主性が尊重されていると考えられる。保育者自身と子どもがともに主体となることが指摘されている（浅川，2009）。そして保育者同士の関係が民主的であることが保育の質にとって重要であることも指摘されている（大宮，1997）。保育者自身の主体性が尊重されることが重要である。これらのことから、保育者の服装が私服である幼稚園では、保育者自身の主体性が尊重されるがゆえに、保育者も子どもの主体性や自主性を尊重する保育実践を展開しているのではないかと考えられる。また子どもの服装がお揃いである園よりも個人によってバラバラである園の方が子どもの自主性を見守る保育実践を行なっていることが明らかになった。子どもが日中、どのような服装で過ごすのかというのは、園で決めているのか、子ども自身に任せているのかの違いを表しているだろう。そのため、お揃いの服装で過ごす園より、バラバラの服装で過ごす園の方が子どもの自主性を見守っているといえる。

次に「先回りの保育実践」因子では、反対に保育者の服装がバラバラのエプロン等や個々バラバラの服装である方が、保育者の服装が私服である園に比べて先回りの保育実践を展開していることが明らかになった。この結果は先ほどの「子どもの自主性を見守る保育実践」因子と同様のことが言えると思われる。子どもが何かをやったり、子ども同士がトラブルを起こしたりした際、子どもたちに任せるのではなく、保育者が先回りするのであるから、バラバラのエプロン等や個々バラバラの服装の園の方が私服の園よりも保育者の主体性を尊重されていないがゆえに、保育者自身も子どもの主体性に任せることが少なくなるのだと思われる。

最後に「子どもに合わせた保育実践」因子では、お揃いのエプロン等の園とバラバラのエプロン等の園において、私立園よりも公立園の方が、平均値が高かった。そして私立幼稚園において、保育者の服装が私服である方が、それ以外よりも平均値が高かった。つまり、私立園よりも公立園の方が子どもに合わせた保育実践が行われやすいこと、私服である園は他に比べて子どもに合わせた保育実践が行われやすいことが明らかになった。お揃いのエプロン等、バラバラのエプロン等のみだったが、公立園の方が子どもに合わせた保育実践が行われやすいという結果になったのは、そもそも全体的に公立園の方が子ども中心的な保育実践

² 本文に「女性」と書かれているため、そのまま引用した。

がなされていることが関わっていると思われる。事実、この因子に関しては、運営主体の主効果も出ていたことからその影響であると考えられる。そして私立園において、保育者の服装が私服である方がその他の服装よりも子どもに合わせた保育実践が行われやすいという結果は、その他の因子で見られていたのと同じように、保育者自身が自らの自主性が尊重されていると考えられる。そのため保育計画を立てたとしても、その場の雰囲気や子どもの動きに合わせて保育者が自らの判断で柔軟に変更できるようになっているのではないだろうか。そのため、子どもに合わせた保育実践をしやすい状況になっているのだと考えられる。

総合考察

本研究では、保育者と子どもの服装に着目して、それと保育実践の関係について検討した。園での子どもの服装、保育者の服装というのは、その園の考え方を反映したものである（入江, 1984; 植原, 2002）。また子どもが日中どのような服装で過ごすのかはとても重要である。というのも宮里（1984）は登園してすぐに園服を脱いで、私服になって晴れ晴れとした様子で遊びだす子どもたちの様子を報告している。そして日中、どういった服装で過ごすのかは保育者が決めるか園の方針で決まっていることであろう。そこで日中、子どもがどのような服装で過ごすのかということと保育実践との関係について検討した。その結果、「子どもの自主性を見守る保育実践」因子のみ、お揃いの服装で日中を過ごす園よりバラバラ服装で日中を過ごす園の方が、平均値が高かった。宮里（1984）は園服には幼稚園の子どもという意味合いがあり、園服を着たままではごっこ遊びもままならないことを述べている。つまり、皆でお揃いの服装には制約があり、自由が少ないことを意味している。そのため、園で過ごす際、どのような服装で過ごすのかは、子どもの自主性をどの程度、尊重しているのかということにつながるといえるだろう。子どもの主体性や自主性を尊重した保育の重要性は枚挙に暇がないほど指摘されている（浅川, 2009などを参照）。そういった保育実践を行なっていくためには、子どもの服装を含めて再考する必要があるだろう。

また保育者の服装もまた重要である。先に三塚（1984）を引用して述べたように、服装と教育内容が密接につながっている。また、植原（2002）や倉橋（1937）が指摘しているように、保育者はただ仕事をすればいいのではなく、保育者は子どもにとって重要な人的環境である。その人的環境である保育者が全員同じ格好をしているのか、私服などを着ることで、個人個人が個性を発揮しているのかは大きな違いだろう。子どもは大人の変化によく気づく。「今日はメガネかけてるね」や「この服、前に着てたね」などというようにちょっとした違いや変化に敏感である。にも関わらず、保育者がエプロンやスモックなどで毎日、同じ格好でいたら、せっかくの人的環境の効果が薄れてしまわないだろうか。このことに気づいているか否かは不明だが、本研究でも保育者の服装が私服の園とそうではない園で違いが見受けられた。全般的に私服である園の方が子ども主体の保育実践を行なっているようである。昨今、保育の質の大切さが主張され、その中でエビデンスベースの重要性も指摘されるなか、どのような保育を受けた子どもが大人になりどのような社会的状況に置かれているのかのデータが発表されるようになってきた。すでに述べたように保育の質にはさまざまな側面があり、保育実践というのはそのなかの一つにすぎない。そのため保育実践のみで保育の質の高低が決まるわけではない。それを踏まえて、大宮（1997）は、構造化されたカリキュラムのもとに展開される保育よりも、子どもの自発性に基づいた保育実践の方が発達に良好な影

響をもたらすことを指摘している。このようにどちらかということ子どもが受動的に過ごすよりも主体的に過ごす保育の方が将来の社会的状況に効果があるといわれている。これに関して、本研究では、保育者の服装が保育実践に強く関係していることが明らかになった。そのため保育者がどのような服装で仕事しているのかを今一度、検討してもいいのではないだろうか。それに合わせて園の理念や方針などもあわせて検討し、どのような子どもを育てたいのか等々も再考することが必要なのではないだろうか。

本研究では学生が実習した幼稚園で行われていた保育実践について、学生が評定するという方法を行なった。これには一定の意味があると考えられるが、やはり限界もあるだろう。改めて調査方法を再考する必要がある。また子どもと保育者の服装について大雑把な聞き方になってしまったことは課題である。保育者がエプロンなのかスモックなのかなども検討する必要があるし、子どもの服装が園服なのか、遊び着なのか体操着のかなど細かく検討する必要があるだろう。

文献

- 秋田喜代美・箕輪潤子・高櫻綾子 2007 保育の質研究の展望と課題．東京大学大学院教育学研究科紀要，47，289-305.
- 秋田喜代美・佐川早季子 2011 保育の質に関する縦断研究の展望．東京大学大学院教育学研究科紀要，51，217-234.
- 浅川繭子 2009 子どもと保育者がともに主体である保育についての検討：自由保育と一斉保育の比較から．植草学園短期大学研究紀要，10，67-78.
- 浅村都子・東 重満・河野由紀子・橋村美穂子 2014 生涯にわたって成長を支える「主体性」を仲間との関わりの中で育む．これからの幼児教育 2013 年度春号，2-5.
- Garland, C., & White, S. 1980 Children and day nurseries. Grant McIntyre.
- 原田妙子・長谷川紀子 1996 幼稚園・保育園における制服の現状．名古屋女子大学紀要 家政・自然編，42，21-32.
- 原田妙子・長谷川紀子 1997 幼稚園・保育園の制服の形態とその考え方．名古屋女子大学紀要 家政・自然編，43，57-67.
- Harms, T., Clifford, R.M., & Cryer, D. 1998 Early childhood environmental rating scale (Revised Edition). Teachers College Press. (埋橋玲子(訳) 2008 保育環境評価スケール ①幼児版(改訂版). 法律文化社)
- 林 悠子 2014 保育の「質」として語られてきたこと．佛教大学社会福祉学部論集，10，49-65.
- 入江礼子 1984 幼児と服：園服再考．幼児の教育，83(10)，20-25.
- 梶田正巳・後藤宗理・吉田直子 1984 幼児教育専攻学生の「個人レベルの指導論」の研究．名古屋大学教育学部紀要．教育心理学科，31，95-112.
- 梶田正巳・後藤宗理・吉田直子 1985 保育者の「個人レベルの指導論 (PPT)」の研究：幼稚園と保育園の特徴．名古屋大学教育学部紀要．教育心理学科，32，173-200.
- 菊地紫乃・内田伸子 2012 子ども中心の保育：子どもの主体性を大切にすの援助．教育総合研究：江戸川大学教職課程センター紀要，1，8-15.
- 木山徹哉・菊池道興・森博文・片山順子・長谷川勝久・小方圭子 2002 保護者の保育ニーズに関する実証的研究．九州女子大学紀要，39(1)，17-30.

- 鯨岡峻 2000 保育者の専門性とはなにか．発達，83, 53-60.
- 鯨岡峻 2014 子どもを「主体」としてとらえ、今を認めながら未来を示す保育を．これからの幼児教育 2013 年度春号，12-15.
- 倉橋惣三 1937 服装：保母諸君と語る（二）幼児の教育，37(2), 1-3.
- 黒田静江 2013 子どもの主体性を育む援助のあり方を考える．植草学園短期大学研究紀要，14, 13-19.
- 三塚タケオ 1984 服装の社会科学(1): 保育労働者の仕事着．評論・社会科学，24, 51-72.
- 宮里暁美 1984 子どもが園服を脱ぐ時．幼児の教育，83(10), 26-29.
- 宮沢秀次・増田公男 2007 保育者養成課程大学生の保育観と子ども観（1）人文科学論集（名古屋経済大学），79, 107-115.
- 森 林・七木田 敦・青井倫子・廿日出里美 1991 行動場面における保育行動の特性．広島大学教育学部紀要，40, 181-186.
- 中 俊博 1996 保育者の保育観：幼稚園と保育所の比較からみた．和歌山大学教育学部教育実践研究指導センター紀要，6, 129-142.
- 中澤 潤・鍛冶礼子・石井恭子 1995 幼稚園教師の食事場面における援助の分析：子どもの発達と教師の保育観．保育学研究，33(1), 59-67.
- 中澤 潤・中澤小百合・松下正人・石橋由美・松井美智子・山口雅史 1993 子どもの持ちあじと保育者の持ちあじとのかかわり．祐宗省三（編著）子どもの持ちあじを生かす園保育，pp.215-222. フレーベル館．
- 野口隆子・小田 豊・芦田 宏・門田理世・鈴木正敏・秋田喜代美 2005 保育者の持つ”良い保育者”イメージに関するビジュアルエスノグラフィー．質的心理学研究，4, 152-164.
- 野口隆子・鈴木正敏・門田理世・芦田宏・秋田喜代美・小田豊 2007 教師の語りに用いられる語のイメージに関する研究：幼稚園・小学校比較による分析．教育心理学研究，55, 457-468.
- 小原敏郎・入江礼子・白川佳子・上垣内伸子・酒井幸子・内藤知美・吉村 香 2013 保育者の保育観に関する研究：保育経験年数、保育所、幼稚園の違いに着目して．保育士養成研究，31, 57-66.
- 大宮勇雄 1996 保育カリキュラムの「構造化」と子どもの生活経験の質：欧米における「保育の質」研究の到達点（1）福島大学教育学部論集，60, 91-110.
- 大宮勇雄 1997 「保育の質」への人間関係論的アプローチ：欧米における「保育の質」研究の到達点（2）福島大学教育学部論集，63, 65-80.
- 下山田裕彦・小林直樹 1996 子どもの解放と保育者の変容についての基礎研究．静岡大学教育学部付属教育実践研究指導センター紀要，5, 53-64.
- 住田正樹・山瀬範子・片桐真弓 2012 保護者の保育ニーズに関する研究：選択される幼児教育・保育．放送大学研究年報，30, 25-30.
- 砂上史子・秋田喜代美・増田時枝・箕輪潤子・中坪史典・安見克夫 2015 幼稚園4歳児クラスの片付けにおける保育者の実践知：時期の異なる映像記録に対する保育者の語りの分析．日本家政学会誌，66, 8-18.
- 田中浩二・大塚良一・福山多江子・田中利則・中川浩一・肥塚新一 2013 保育所の保育者と保護者の保育観に関する意識の比較．東京成徳短期大学紀要，46, 11-21.
- 植原邦子 2002 保育と教師の服装について．兵庫大学短期大学部研究集録，36, 88-95.